

# 効率的な全身清拭の工夫

## — 熱布清拭を試みて —

5階西病棟

○多田 邦子 弘末 正美 中村恵津子

小松真由三 石本美佐子

### I はじめに

人間の日常の生活行動の中で清潔は、重要な要素の一つである。清潔行動によって人間は、生活面だけでなく、心理面、社会面での欲求を満たすことができる。健康人においては、これらの欲求は容易に充足されているが、病人では不十分な状況である事が多い。看護者は、清潔行動が人間にもたらす影響を理解したうえで、病人により良い援助を提供していかねばならない。

現在、私達は、清潔への援助の一方法として、主に清拭を行っている。当病棟では、清拭車の蒸しタオルと、沐浴剤を利用して行う方法が常となっている。この方法は、簡便で施行しやすい反面、患者の清潔への欲求を、十分に満たしきれない面もある。

清拭には、温熱作用、摩擦作用があるが、熱布清拭は、温熱作用を積極的に取り入れた方法で、風呂好きの日本人に、入浴の気分を味あわせる事ができる。

そこで、今回私達は、前述のような利点を重視し、数ある清拭法の中から熱布清拭について再考した。

### II 研究方法

#### 1. 文献学習

#### 2. 熱布清拭の実施

期間 昭和61年9月10日～9月30日

10時～15時

場所 病室（室温24～25℃）

方法 第1段階：鳥取大学医学部附属病院による熱布清拭手順を実施する。

第2段階：上記の欠点を改善し、清拭車を用いて施行する。

第3段階：洗髪車を使用して施行する。

対象 現在入院中で、入浴を禁止されている患者6名。

条件 原則として看護婦2名で行う。

### Ⅲ 結果・考察

今回私達は、看護ケアの見直しとして、統一した看護手順のもとに、熱布清拭を実施してみた。熱布清拭とは、患者の皮膚を十分に蒸らすことにより、患者に入浴した時と同じような爽快感を与える清拭方法である。

第1段階で施行した方法は、バケツに60℃の湯を3～4ℓ準備し、蒸らすためのバスタオル2枚、患者用タオル8枚、おしぼりタオル1枚使用し、患者の皮膚を蒸らしながら、石けん清拭していく方法であった。この方法では、①バケツに湯を準備するために、湯の温度が一定に保たれにくく、頻回のさし湯が必要となる。②3～4ℓの湯では十分でない。③汚水処理などの後始末に時間がかかる。以上のことから、湯の温度調節に時間がかかり、皮膚を蒸らしているタオルがさめやすい。また、施行時間が40分程度と長くなり、患者に負担となることが明らかとなった。

第2段階では、第1段階での問題点をふまえ、湯の準備の必要がない清拭車を、ベッドサイドに持ち込み、蒸しタオルを使用した。この方法では、①一度使用すると温度が下がり、タオルの再使用ができない。②患者の爽快感を十分得るまでには、頻回のタオル交換が必要となり、一人の清拭に蒸しタオル35枚程度を要した。③しぼる前の蒸しタオルの温度は92℃、タオルを広げた際の温度は65℃と高く、清拭時、最も爽快感が得られると言われているタオルの温度45～50℃と比較すると、温度調節がむずかしく、また、患者に熱傷をおこす危険性もある。以上の問題点から、この方法は実用的でなく、多くの患者に施行できない。

第3段階では、再三にわたって検討した結果、十分な湯が保温でき、汚水処理が簡単な洗髪車の使用を考案した。バケツを用いて行った方法と比較し、洗髪車を用いることで、湯の温度を一定に保つことができ、洗髪車には30ℓ入り、十分な湯を用意することも可能となった。又、汚水処理も簡単で、洗髪車のシャワーを使用することにより、足浴・陰部浴も手際良く行うことができるようになった。

最初、湯の温度は、水道の最高温60℃程度にして施行してみた。しかし、患者から、「むしっているタオルが、すぐにさめてくる。」という意見がきかれたため、湯沸器の湯を加え、徐々に65℃まで上げてみた。65℃前後で行うと「後から良くあたたまって、気持ちがいい。」という感想が一番多くきかれた。このことにより、湯の温度は、63～65℃程度が適切であると考えられる。これ以上になると、タオルの温度が50℃以上となり、熱傷の恐れも出現してく

る。

手技の面では、手順どおり、胸部から蒸らし、背部、殿部と行ってみたが、患者から、「お腹を温めながら、足を洗って欲しい。」という意見がきかれた。そのため、まずはじめに、背部から殿部を施行し、胸部へと移行する方法を試みた。この方法で施行すると、胸腹部を十分に蒸らしながら、足浴、陰部浴なども同時に施行することが可能となった。しかし、胸腹部の蒸しタオルは、3分間程度で急激な温度低下をきたすために、足浴、陰部浴などを施行する際は、数回のタオル交換が必要である。このことにより、温熱作用を少しでも長く与える方が、より入浴に近い効果を受ける事が分かった。また、石けん清拭については、十分にタオルを泡立てた方が、より爽快感を得られるという意見が多かった。

施行時間については、患者一人当たり30分程度かかる。従来の蒸しタオルのみの清拭よりも時間はかかるが、石けん清拭、足浴、陰部浴も含めるため、患者の爽快感は入浴に近いものが得られ、時間的な苦痛の訴えはなかった。十分な保温効果をあげるためには、最低30分程度は必要である。この30分間に熱布清拭を通じて、コミュニケーションをふかめ、今まで気が付かなかった患者の一面を知る事もできた。

洗髪車を使用した熱布清拭を施行してみて、患者の反応は、「身体がしんから温まった。」また、週に一回、介助にてシャワー浴をしている患者は、「シャワーよりも身体が温まる気がする。」などの感想があり、入浴に近い効果が得られることを再確認した。

しかし現状では、一人の患者に看護婦2名が介助して、30分間の熱布清拭を実施することはむずかしい。そこで、各々の患者に、毎日行っている清拭以外に、週一回この方法を取り入れ、看護計画に加えていきたい。また、所要時間の30分は、腰痛や背部痛が強く、体位変換の困難な患者、全身衰弱・倦怠感の強い患者には負担が大きい。このような患者には、熱布清拭は避けるべきであろう。しかし、このような患者にも、爽快感を与えることのできる清拭方法が必要である。日常の看護業務の中で、多くの患者に施行できる実用的な清拭方法の考案が、今後の課題である。

#### IV おわりに

熱布清拭の効果は、以前より知られていたが、当病棟では、あまり普及していなかった。今回、私達は、科学的根拠に基づいた方法で患者のニードを満たすために、5階西病棟における熱布清拭の手順を作成し、実施した。

作成した手順を実施することにより、施行者間の個人差を少なくし、また、入浴の機会を

与えられない患者に、入浴したような爽快感を与えることができた。しかし現状では、いくつかの欠点もあり、より効率的な手順を考える必要がある。また、施行者が、患者への苦痛を最少限にし、より効果的な熱布清拭を行うため、熟練すべきである。

今後、ケアの一環として、熱布清拭をより多く取り入れ、積極的にすすめていきたいと思う。

#### 〈参考文献〉

- 1) 山根信子：生活技術として“ナーシングスキル”を考える，月刊ナーシング総集編3，1986
- 2) 佐藤ふさ：寝たきり老人の入浴—施設での入浴，看護MOOK，No2，金原出版，1982
- 3) 勝沼晴雄：環境保健学，医歯薬出版株式会社
- 4) 川島みどり：CHECK it UP ①日常ケアを見直そう，医学書院，1985
- 5) 丸山千代他：入浴後の体温変化と適切な体温測定的时间—物理学的な解析をとおして—看護実践の科学，6，1984
- 6) 細貝明美：清拭バスマットの工夫，クリニカルスタディ，5(7)，メヂカルフレンド社，1984
- 7) 丸川和子：全身清拭—就床患者の皮膚の清潔—看護MOOK，No2，金原出版，1982

（昭和62年3月7日 高知市にて開催の日本看護協会高知県支部  
昭和61年度看護研究学会で発表）